

# 答辞

冬の凜とした寒さも過ぎ去り、柔らかな日差しが木々に降り注ぐ季節となりました。本日は新型コロナウイルス感染症の余波が続く中、ご来賓並びに教職員の方々をはじめ、皆様のご臨席を賜り、このような盛大な学位授与式を開催頂きましてことを、卒業生一同を代表しまして深く御礼申し上げます。

振り返れば四年前、期待と不安を胸に私たちはこの応用化学科へ入学しました。新生活への憧れはすぐに、理工学部においても屈指の忙しさへの動転に取って代わられました。否応なしに降りかかる課題やレポートに四苦八苦する様子は今で

もありありと目に浮かびます。先生方の専門性の高い講義内容に最初はついていくだけで精一杯でしたが、仲間たちと協力し合ったり、自学自習を繰り返したりするうちに、次第に化学への道が開かれていきました。傍らにアルバイトやサークル活動などに励む者もおり、多忙ながらも充実した日々はあっという間に過ぎていきました。

ようやく大学に慣れようとした二年目、大学生活は思い掛けない曲がり角を迎えました。コロナ禍の影響により、講義に加え実験さえもオンライン授業となり、当たり前のように続いた日常が一転しました。しかしそんな中でも授業はペースを落とすことなく進み、時間制限付きのクイズやこれまでにも増して重い課題に先生方の意地や気合が垣間見えしました。今となっては、実如のデジタル化に対応を迫られたのも、あれほど中身の濃い授業を組み立てられたのも、教職員の皆様が大変な努力を重ねられた結果であろうと気づきま

す。そして私も多様性のある授業形式に慣れますと、世界最先端の化学を駆使した先生方の魅力的な講義に引き込まれました。

対面授業を取り戻して間もなく、研究室配属を迎えました。ゼロから装置の扱い方や実験操作を覚え、先輩方の研究を手伝い、そして自らのテーマを考案し進めるに至るまでかなりの時間を要しました。手探りで正解のない結果へたどり着くには、文献を読み調べ、断片的な情報から全貌を推論する能力も必要です。先生方や先輩方の熱意がこもった指導のお陰で研究の進め方、思考錯誤からの経験のまとめ方を習得し、ゼミ学習や英語発表におきまして、国際性を含めた多角的な視野を学ばせて頂きました。私個人に関しましては共同研究の機会を頂きましたことがとても大きく、大学側だけでなく、企業側がどのようなにして結果を評価し、製品へ、社会へ応用していくのかについて知ることができ、今後の糧となりました。

応用化学科において学び得たことは決して直線的ではなく、複雑に絡み合いながら広がる地図のようなものであると感じます。要所要所の道標を先生方は示してくださりますが、歩んでゆく過程や、その都度の発見は一人ひとり異なるものです。またこうした体験を分かち合い、共に歩み、切磋琢磨してくれた仲間たちは掛け替えのない存在であり、一生の財産であると感じております。長く続きましたコロナ禍もついに終わりの兆しを見せ、どんなに長い冬であろうと春は訪れました。しかし変化は変化を呼び、長く続く伝統もいつまでも同じまま引き継がれないことは、四年間

を通して身をもつて体験しました。目まぐるしい激動の時代を生き、これからの世界を先導していく役割を担うであろう私たちが大学生活から学習したことは、知識だけにとどまりません。困難に直面した際にも学問を究めた者として自らをしっかりと見定め、挑戦を厭わないことが更なるス

テージへの飛躍に繋がるのでしよう。

さて、今、四年前とは異なる期待と不安を胸に、私たちはそれぞれの新たな門出を迎えます。大学院へ進学したり、就職したり、自分を見つめ直すための旅へ出たりと、一人ひとりの行く先は異なりますが、ここで得られた知識や体験は決して裏切ることはありません。私たち卒業生が、この応用化学科を卒業したことに誇りを持ち、周りや社会を支えつつも、自分にとって満足のいくような人生を歩むことを切にお祈り申し上げます。

最後となりましたが、熱心なご指導、ご鞭撻を賜りました先生方、様々な場面で力添えいただきましたました事務局職員並びに応用化学会の皆様、最も身近でご助言くださった先輩方や同期たち、どんな時も私たちを温かく見守り、このような恵まれた大学生生活を支えてくださった家族に改めまして心より御礼を申し上げます。

皆様のご健勝、ご活躍、そして応用化学科の更なる発展を願いまして、答辞とさせていただきます。

二〇二三年三月二十六日

早稲田大学先進理工学部応用化学科

卒業生代表 宋美慶